昭和25年9月1日第3種郵便物認可　令和2年9月1日発行（毎月1回1日発行）第71巻第9号通巻842号　ISSN0559-6963

月刊 社会保険 9

2020 VOL.842
一般社団法人
全国社会保険協会連合会

日本年金機構からのお知らせ
厚生年金保険における標準報酬月額の上限の改定
日本年金機構における広報
2019年度 年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）の運用状況（概要）
協会けんぽの令和元年度決算見込み（医療分）について〈協会会計と国の特別会計との合算ベース〉
協会けんぽからのお知らせ
【事業主・加入者のみなさまへ】令和２年度被扶養者資格再確認について
経済財政運営と改革の基本方針2020 ～危機の克服、そして新しい未来へ～（概要）

認知症とともに生きる 家族の物語

● 第5回 ●

「認知症とすい臓がん」 それでも最期まで家族を思いつづけて逝った父

NPO法人ハート・リング運動専務理事
早田　雅美

神奈川県に住む松平美香子さん（55歳）は、半年に1回くらいのペースで、両親の住む島根県出雲市の実家に帰省していた。

高齢の父が手足の不自由な要介護4の母を1人で介護していることがいつも気がかりだった。美香子さんが帰省するとき、父の堀田泰之さん（仮名）はJR山陰線出雲市駅の改札まで必ず迎えにきていた。泰之さんは昭和7（1932）年生まれ。60歳になった頃から腰が大きく曲がって腰痛に悩まされ、歩くのも車の運転もひと苦労ではあったが、楽しみに待っていた次女の帰省に、いつも笑顔がこぼれていた。

「疲れたじゃろう。お母ちゃんももうデイサービスからもどっとるけん」。電話では耳にしながらも、そんな父の出雲弁を聞くと、美香子さんはどこか気持ちがほっこりするのを感じた。

娘と孫の帰省はなによりの楽しみ

美香子さんは高校卒業後東京の短大に入学し実家を離れた。現在家族は、夫と小学生の男の子、フルタイムの共働きで美香子さんも多忙を極めていて、月のうち10日前後も出張で家を空けることもめずらしくない生活だった。

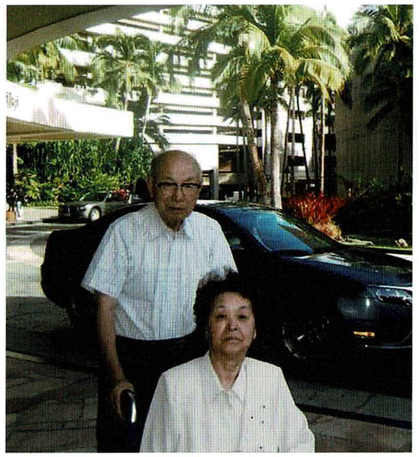
いつものように父の運転する車で実家へ。父にとっては住み慣れた地元の道路だが、70歳を過ぎた頃から泰之さんの運転する車に乗っていると「危ない！」と思わず自分の足を踏ん張ってしまうようなことが増えだしたという。

駅から20分ほど、一面に広がる田んぼ、そのはるか遠くに出雲の山並みがゆったりと広がるとてものどかな田園風景のただ中に美香子さんの実家はあった。ここの自然に満ちた空気を胸いっぱいに吸い込むだけで、美香子さんはいつも都会のストレスが半減する思いを持ったという。

車いす生活の母

「お帰りなさい、待っとったよ」。玄関の正面の部屋で、横になって休んでいる母の靖子さんの声。母の靖子さんは要介護4で常時寝たきり、平日は毎日迎えが来て近くのデイサービスで過ごしていた。靖子さんは59歳のときに脳出血で倒れ、一時は命も危ぶまれたというが奇跡的に回復。リハビリの効果があって自宅で暮らせるまでになった。しかし、右手と足は麻痺して動かず、言葉にも障害が残ってはっきりとした会話は難しい。家の中でも移動はすべて車いす、車いすからベッドに移ることも、着替えもトイレも自分ではまったくなにもできないからだとなっていた。認知症もみられる。

田園風景につつまれた家の中で、泰之さんが


どこへいくときも妻の靖子さんの車いすを押す泰之さん

仕事のかたわら10数年もの間、老々介護で靖子さんの世話をしてきたのだった。「私になにかあったらお母ちゃんはダメになる」。それが泰之さんの口癖だった。

泰之さんは、もともとは島根県の法務局に努める公務員だった。公務員を退職後は司法書士として自分の事務所を開き、地域に多くのお客さんを抱えていた。まじめ、実直、曲がったことは大嫌いという性格で、若い頃は釣りやマージャンが好きで、大の野球ファン。最近はテレビ中継後も、スポーツニュースで応援するチームのニュースを全部チェックしていた。当然妻の靖子さんもそんな泰之さんを全面的に頼って生活をしている。なにをするにも「お父さん!」と泰之さんを呼ぶ。

父は認知症?

泰之さんに「認知症」という診断がついたのは70歳になってからすぐのことだった。はじめにその異変に気づいたのは美香子さんだった。

実家に帰って冷蔵庫を開けると父の好物の「キムチ」が何個も何個も入っている。奥のほうのものはすでに3カ月くらい前に賞味期限がきれているものもある。おなじ「ショウガ」も何個も入っていた。「お父さん、どうしたのコレ!!」に「わかっとるけん!」と泰之さんは言い返す。その次の帰省のときもその状況はさらに悪化している。あんなにきっちりとしていた父が、なにかおかしい…。

ちょうどその頃美香子さんは40歳を過ぎて初めて妊娠し、出産を迎えることとなった。会社を休職して、島根の実家で出産することに決めた。高校を卒業してから両親のもとで暮らすのはなん年ぶりになるのだろう。父のそばで父の暮らしをサポートできることも美香子さんにとってはよい機会だと思ったという。ところが暮らしてみると不安は増してきた。

もともときちんとメモをとるタイプの泰之さんではあったが、スーパーに買いものにいく前にいろいろメモを書いている。しかし買ってきたものをみると自分でメモしたものが買えてなく、たりないものを買いたしに、帰宅してすぐまた2度目の買いものに出る。複数の外出先を1度にまわればよいものを、なぜか1カ所だけいって帰ってきてしまう。

美香子さんが父の受診を決めたきっかけは「テレビショッピング」だった。

父がテレビショッピングで買ったという「つけものツボ」が、物入れに3個も入っていたのだ。買ったことを忘れてしまう? 病気?

美香子さんの予想は的中して専門医受診の結果、泰之さんには中程度のアルツハイマー型認知症という診断名がつき、妻につづいて自分も要介護となったのだった。老々介護ではなく認認介護。ところが「認知症」といわれると父は表情をゆがめて憤る。

完璧を求めない

「お父ちゃんをバカにするな! そんなことばかりいうなら子どもは東京で産めばいい!」。父のミスを指摘するとかならず言い合いになる。そして家の中にこわばった空気が満ちてしまう。

自分が実家に帰ってくる前もたぶん父は同じように小さなミスや間違いを繰り返しながら暮らしていたはずだ。父自身も自分の異変をきっと理解している。せっかく父をサポートしようと思ってきたのに、自分が父の間違いを指摘することで、決して家の中がよい空気にはなっていない。皆が不幸になっている。

そのことに気づいてから、美香子さんは、父に「完璧を求めない」ことに決めたという。もちろん危険なことは避けてもらうが、物忘れも、間違いも基本的には飲み込むことにした。認知症はたしかに病気に分類されてはいるけれども、家族はそういうレッテルに左右されないようにする。

気持ちを切り替えて以来、美香子さんは、認知症とはいわれながらも、精一杯に生きる父らしい誠実な姿とやさしさは昔からどこも変わっていないことに今さらながら気づいたという。

母はそんな父の状況を理解できないので、今までどおり「お父さん!」を連発する。父はしていることを投げ出して母のヘルプにすぐ応えようとする、介護保険で家に入ってくるヘルパーに「ご苦労さま」とお茶をだそうとしている姿。そして、妊婦の自分の健康を気遣って、どことなくちぐはぐな「健康食」をつくってくれる姿。なんとか美香子さんのからだへの負担を減らそうと考えているのが伝わってくる。

姉の子どもが泊まりに来たときには、女の子だからとスーパーでお茶菓子と一緒に生理用品を捨てるための小さなサニタリーBOXまで買ってきたことには、「どこが認知症?」と頭の下がる思いと驚きでいっぱいになったという。

その後美香子さんは出産に際して、急性の妊娠中毒症状で救急搬送となり、緊急帝王切開となったというが、そのときも深夜から明け方まで病院で美香子さんに付き添って奔走し病院側といろいろ話をつけたのも泰之さんだった。

孫の出産のとき

自分の限界を知った父

認知症の進行を防ぐ助けになるならと、美香子さんは父に司法書士の仕事はつづけてほしいといつづけていたという。しかし、ある日「事務所をたたむ」といいだした父。

最期まで父からの説明はなかったが、間違いの許されない仕事であるため、きっと父は自分がなにか許せないミスをしたことをきっかけに引退を決めたのではないかという。事務所の整理を手伝っていたときにふと見かけた父の背中が、とても寂しげだったという。

すい臓がんが見つかる

それから3年後の正月に、泰之さんは「すい臓がん」の診断を受けることとなった。最近痩せてきたなと不安に思っていた美香子さんが、人間ドックの受診を勧めたことがきっかけとなった。実は前年に健診を受けさせようとしたが申込期限を数日過ぎてしまい受けられず、1年後のドック受診となったのだったという。

悪性腫瘍は、すい臓からすでに肝臓まで転移が認められた。余命宣告は「1年」。一家に突然降って湧いた大事件となった。

「自分になにかあったらお母ちゃんはダメになる」。これまでもそう言いつづけてきた泰之さんは、しばらくの間は自分の運命を受け入れられないといった様子だったという。しかし、ときを移さずに気持ちの整理をつけたのか自分が居なくなったあとの妻の入所先の準備やいわゆる「終活」に精魂を傾けていった。認知症の進行で、この頃泰之さんが書いたメモの文字には誤字も多いが、残していく家族に対する泰之さんの想いがにじむ。

認知症をおそれることはない

翌年、泰之さんは大好きな地元出雲で静かに旅立っていった。現在妻の靖子さんは娘の家に近い関東地方の介護施設で暮らしている。娘の美香子さんはあらためて次のように語っている。

「帰省して老々介護の両親と会うたびに、この姿をいつまで見ることができるだろうか、いつもその不安が心にありました。父の認知症は徘徊してしまうような段階ではありませんでした。でも一緒に暮らしてみてわかったことがあります。認知症を特別な病気扱いしたり、こちらの不安やイライラを本人にぶつけてもなにもよいことは生まれない。今までと変わらない父として苦手になってくる部分のサポートさえしてあげれば、認知症そのものはなにもおそれることはないということです。そのことは現在母の認知症に対しても同じことだと感じています」。

いつどこの家庭にも訪れる可能性のある一家の経験は、私たちに多くのヒントを与えてくれている。